

発行所
薫風・満天フィールド
交流塾新聞部

〒010-0444
秋田県南秋田郡大潟村
字南2丁目2

公立大学法人 秋田県立大学
大潟キャンパス内
学生支援G P事務局
電話 0185(45)3211

発行人
伊藤 さゆり
斉藤 東加

公立大学法人 秋田県立大学

薫風・満天フィールド交流塾

薫風・満天新聞

2008年(平成20年)11月28日(金)

創刊第3号

きょうの紙面

▽主張、遊びの先輩登場、学生の気持ち …… 2面

▽写真グラフ …… 3面

▽市民サミットに行ってきた私の視点 …… 4面

気分はすっかり山小屋暮らし

薫風・満天フィールド交流塾の活動の拠点となる「村作り」が、県立大学大潟キャンパスフィールド教育研究センター(秋田県大潟村)で進んでいる。中心となって作業しているのは、塾生のグループ「チームSAT」(25人)。自分たちで描いた構想に基づいて、村全体の完成目標を3年後に置く長期計画だ。9月から精力的に取り組んだ丸太小屋は、ほぼ出来上がり22日、祝いの式典が行われた。メンバーはそれぞれの「村暮らし」に思いをはせながら、喜びを分かち合っていた。

これが塾生の活動拠点・丸太小屋だ！ 村作りに大きな弾み



ほぼ完成した丸太小屋の前で喜び合うチームSATのメンバーら

提案を一本化

塾の活動拠点となる村作りは、テレビ番組の「DASH村」のような場所を作りたいという学生の提案に、丸太小屋、小川、畑、ハーブ園作りなどの活動メニューを加え、一本化させた。学生の活動を後押しする酒井徹准教授(アグリビジネス学科)はその狙いを、「活動拠点が充実した機能を持つことで、さまざまな活動をより効果的に進める。活動内容を、分りやすく具体的に示す役割も果たせよう」と説明する。

多機能の施設

しかし、完成予想図(注:別図参照)を見ても分かる通り、ひとつの理想郷が描かれている。学生らがまとめた構想によると、村には丘陵、小川、池、散策路などが配置される。シンボルツリー(植種未定)のほか、サクラ、モクレン、モミジ、ナナカマド、ハンノキなどを植え、小川の下流にはビオトープも作られる。畑やハーブ園での農作業もできる。

丸太小屋はほぼ完成

丸太小屋は本体がほぼ出来上がり、22日にはSATのメンバーやかかわった教職員が集まって、喜びに声を弾ませながら互いの労をねぎらった。丸太小屋と並行して丘陵、小川作り、植栽作業にも入っており、計画は順調に進んでいる。酒井准教授は期待を込めて話す。「この村の基本理念は、何でもやる、ということ。塾生それぞれのふだんの活動はもちろんだが、イベント、大学間や地域の人たちとの交流の場としても活用できる。夜は時間を気にしないで語り合う場にしてもいいのでは…」



村の完成予想図



なお、チーム名のSATは秋田弁で「ちよっと」「小さい」などを意味する「さつ」と「さつ」とに由来する。「村のキャッチコピー・住んで、遊んで、楽しい」の頭文字にも、ひっかけているという。メンバーは25人とまだ「過疎化状態」。「やってみたいと手を上げるだけで、村民になれる。一緒に元気を村を作ろう」と広く呼びかけている。

特別寄稿



私の遊びを考えると…

秋田県立大学教育担当理事
森 宏 一

交流塾の主たる活動は「遊び」だそう。遊びから人間力を高めることを狙っている。しかし、「遊び」にそのように難しい効果があるなどと思っただけでなく、私には、どのような「遊び」が効果のある「遊び」となるのかはなかなか理解できない。最も子供時代に十分な「遊び」を経験していない最近の若い人

今、借家に住んでいる。敷地が比較的広く、家庭菜園や花壇を作る十分なスペースが確保できる。朝早くに起きて、犬の散歩を済ませ、菜園に出て育ち具合を確認、収穫し、その後場合によってはシャワーを浴びることもあるが朝食を済ませ、職場へと向かう。これが私の朝の日課の「遊び」である。

それが「遊び」か？少なくとも家族はこれを「遊び」と言っている。「遊び」でぎっくり腰になったり、腱鞘炎になったりするのも愛嬌である。「遊び」に辛いことはなく、使命感無しにでき、好きなきにやめられるし、飽きがこないことも大事なことである。もし、これが規制されるとそれは「遊び」で無くなる。「遊び」

とはそういうものだと思っている。従って、人間力を高めるなどと思っただけでなく、私には「遊び」をどのように人生に生かすか考えるところからきつと人間力の向上に役立つのであろう。後どれくらい時間があるか判らないが、私の「遊び」を通じて自身の人間力を高めていきたいものである。

薫風抄

8月初旬、船釣り、磯遊び、ライブ、キャンプといった多彩なイベントを、1泊2日で繰り広げた。参加した学生にアンケート調査したところ、一番印象に残ったこととして、地元老人たちとの交流を挙げた。それもほとんどの学生が、そう答えた。意外な結果に思えるかもしれないが、私は思わずニンマリした▼というのも、これまでの塾の活動で、携わった講師や地域の方々に、いつも「また、来いや」と声を掛けられていたからである。取り組む姿勢の明るさが、好印象を与えたのだろう。思い当たる節がある。それは学生の良い意味での先輩、後輩への互いの気遣いであり、だからこそ醸し出される清々しさである。同じ目的を持って活動する仲間がいることも大きい▼社会に出ると、講義で学んだことをすぐに活かせることは少なく、一から新たな挑戦が始まる。仕事や社会生活は一人で成し遂げることはほとんどない。人とのつながり、社会とのつながりで自分を活かせる▼塾の活動を通じて仲間、教職員との交流、地域社会との交流を深め、物事に対して柔軟に対応できる己を磨いておくことの意義は大きい。それを自然との触れ合い、遊びの中で培えるのだからなおさらである。もっと多くの学生が、気構えず活動に参加することを望みたい。(交流塾塾長補佐・武田萬蔵)

「ひたすら作りたい」 アグリビジネス学科 2年 見上 歩

この村作りの話を最初に聞いたとき、ひたすらに『作りたい』という強い願望だけが心を占めた。私は元々、何かを創造したいという気持ちがある。私は元々、何かを創造したいという気持ちがある。私は元々、何かを創造したいという気持ちがある。

この村作りの話を最初に聞いたとき、ひたすらに『作りたい』という強い願望だけが心を占めた。私は元々、何かを創造したいという気持ちがある。私は元々、何かを創造したいという気持ちがある。私は元々、何かを創造したいという気持ちがある。

「一緒に村、作れへん？」 生物環境科学科 1年 植田 行則

電車が1時間に4本しか来ない大阪の田舎からやって来た私の目の前に、大瀧村の田舎ぶりは堂々たる貫禄で立ちはだかる。休日の交通手段は少なく、最寄り駅まで15キロ。ヤシの木一本生えただけの絶海の孤島にも似て「出られるものなら出てみれ」と言わんばかりである。

休日の寮生は軟禁状態に等しい。大阪にいた頃は、元々都会まで出かけたような気分ではなかったのだが、こもも出られなくなる話は別である。かくして私の思考回路



遊びの先輩登場！③

真剣に取り組んでこそ遊び人



酒井 徹さん (41)
アグリビジネス学科 准教授

「村作りが活発化してきて、村の構想がまとまり、活動メンバーが集まって、ますます勢いを増しています。この気持ちをみんなに分かち合いたい、と強く願う。感動は仲間が多ければ多いほど、色鮮やかに輝くものだと思う。村作りはその絶好のチャンス。みんなで挑めたら、こんなに楽しいことはない。」



やっぱり自分たちでつくるのは楽しいね。

「村作りには携わる学生たち(交流塾に参加する学生たち)は、先生の学生時代と比較すると、どんなふうに見えますか？」
私が大学生の頃は学生が大学当局ともめながら、寮の運営もやっていました。自分たちの空間を自ら管理していたんです。構内にプレハブ小屋を建ててイベントをやったり、イカダを作ったり、川を下ったりもして、与えられた枠から飛び出す感じがありました。だから、今の学生はおとなしいなあと感じます。大変素直だと思います。

「活動を通して学生にどんなことを知って、感じて、分かってほしいですか？」
独りでは出来ないことを仲間とやって、達成感を感じてもらえたら嬉しいですね。「自分がやった」と仲間とやったを同時にね。勉強も大切だけど、人間としてのベースとなる活力は、遊びから得られると思います。だから1・2年のころは、勉強だけでなくたくさん遊んで、3・4年になつたら研究や就活、卒論に励めばいいんじゃないかな(笑)。県立大学の学生には、遊びを通して元気になつてほしいですね。

「講義と塾の活動の共通点は何ですか？」
僕が教えているのは農業統計学や農業経済学だけど、共通点は講義より、むしろアグリビジネス学科のプロジェクト活動の方が多くなると感じています。講義は先生が考えてやるけど、プロジェクト活動は自分たちで目標を立てて実践して達成させる。先生はお膳立てするけど、中心は学生。塾の活動も学生が中心でしょう。皆で協力してやるってところも似ていますね。



学生たちと一緒に炊製づくりを楽しむ酒井先生



学生の気持ち

一枚のポスターが「加茂ライブ」に参加するきっかけを作ってくれた。それを見て楽しそうだと思ったのだけれど、それが正解だった。振り返ってみて、この出会いに深く感謝している。

「今後の活動方針を教えてください。」
学生自身がやりたいと思うことをどんどん出してもらうって、それができる環境を整えたいと思います。ぜひ自分から声をかけたい、するとその感動を多くの人に伝えられたらいいな。そんな熱意を持っていてくれることだけですね。

「活動は、文章を書いたり、写真を撮ったり、レイアウトを考えたりと、これから役に立つことばかり。」
さあ、次回の第4号は、君と一緒に読みたい！
新聞部加入の申し込みは薫風・満天フィールド交流塾学生支援GP事務局【電話0185(45)3211】まで。

部員募集

薫風・満天新聞部では、一緒に新聞作りを楽しみたい仲間を募集しています。資格は、あちこち飛び回りいろんな話を聞きたい、するとその感動を多くの人に伝えられたらいいな。そんな熱意を持っていてくれることだけですね。

写真グラフィック

異世代との交流、空中散歩、牧場での初挑戦など、薫風・満天フィールド交流塾の夏は、大きなイベントで盛り上がった。それぞれの表情を追った。

加茂ライブ2008

農家体験や市民サミットに参加した人たちのレポートを聞くことができた。その人たちの考え方や農業の現在について、考えるきっかけを得られた。

デンマークの学生は、18歳で自立することを知った。国の体制が違うと、学生の考え方も違うと思った。



祭りの手伝いをして、動物と触れ合って喜ぶ姿を見られたのが良かった。



先輩との会話ができ良かった。ラム肉を食べて動物の命を頂いているありがたさを感じた。



地元住民との語らいが一番良かったと思います。貴重な話を聞くことができた。



自然や音楽を通して人とつながっていけるんだなあ、ということが生きる力になった。



年の離れた人との交流によって得られることの大きさが分かったので、人との交流が楽しめるようになっていくと思う。

音楽で気持ちが1つになったり、年の離れた人と自然に楽しむことが体験できて気持ちよかった。



夏祭り

8月23日、大潟キャンパスフィールド教育研究センターを会場に、一般市民数百人も参加して開かれた。熱気球から大潟村全体を望み、羊など動物との触れ合いコーナーも人気を呼んだ。



牧場に来たのが初めてだったので、すべてが新鮮。牛に触ったときに温かくて幸せな気持ちになった。



牛の乳搾りは、是非とも体験してみたかった。実際に作業してみても、搾った後に乳(ミルク)が補てんされるまで、いくらか時間がかかると知った。新たな発見だった。



学科、学年も違う人たちと協力して料理を作り、自然の中で食べて楽しかった。

牧場で過ごす一日

9月17日、由利本荘市矢島町鳥海山花立牧場公園で、本荘キャンパスの学生、教職員約30人が参加して開かれた。

参加した学生たちは普段、ほとんど接したことがない牛に触れ、乳搾りやアイスクリーム作りに挑戦していた。

住んでいる由利本荘市で貴重な体験が出来た。地元食材を使った昼食は本当においしくて、地元っていいなど実感しました。



